

一	湖千里 祭主	遠江豊後	一	抜机	利吉
一	下 齋竹	六郎右衛門	一	上々御神鏡	伝左衛門
一	下 齋榊	茂兵衛	一	同	磯右衛門
一	金幣	当所 喜平次	一	御神供	喜助
一	同	元四郎	一	同	弥三右衛門
一	同	忠右衛門	一	同	重郎右衛門
一	同	弥三右衛門	一	上々御神酒	重五郎
一	同	九兵衛	一	上々新御棟札	庄屋 喜三郎
一	同和田邑 ^{じよ} 安達多郎右衛門	又右衛門	一	同古御棟札	庄屋 藤右衛門
一	同 伊兵衛	又右衛門	一	同 和田村	庄屋 善左衛門
一	中 青幣	当所年寄与治右衛門	一	同 富益村	庄屋 甚右衛門
一	赤幣	佐斐神 助右衛門	一	同 当所宮	庄屋 権兵衛
一	黄幣	和田村 政五郎	一	同 佐斐神	五兵衛
一	白幣	富益村 吉三郎	一	同 和田村	武左衛門
一	黒幣	源左衛門	一	同 玉殿御棟札	喜助
一	此所棟札入ル		一	同 諸社家	
一	上々指几帳 神鈴 誠衛神子二人		一	同上 大榊	喜右衛門
一	当所 九兵衛 権兵衛		一	同上 押大幣	定之丞
一	御神輿 才神 藤右衛門 重三郎		一	同 御幣	長右衛門
一	和田 善左衛門 茂右衛門		一	同	喜右衛門
一	上々指羽 無官二人		一	同	市郎兵衛
一	上々案上官幣 常右衛門				

一三六 八幡神社主内藤氏系図

米子市東八幡二七六 八幡神社蔵

内藤氏 系図写 天明弐年

一人王五拾三代淳和天皇之後胤にて、内藤備後守藤原綱満北面僕士代々武門職歴二備り後裔数多、凡て内藤氏名此、但定紋藤原の正当にて藤の丸或は片藤これを用う。誠二藤は君を頂載、日徳を仰いで紫色を顕し、畢竟君臣の礼を懐いて日本^本の深き習有り。備後守十六代の孫内藤市正藤原綱教三代の孫、内藤官兵衛尉藤原綱宗、其刻京都足利家之將軍義昭公六波羅守護之勤士なり。その後信長公ニ移り、内藤家も格祿相定まらず程なく大閣秀吉公の御代由所^{由所}礼して忠勤の元となる。然ル処台命に依り当国当郡当社の主職ニ罷り下り、其後社司の主となる。委クハ軍記等ニ出たり。繁多故爰ニ略ス。

一元祖内藤官兵衛尉藤原綱宗

天正拾七年大閣秀吉公御代当社建立の願主雲州戸田城主吉川藏人豊臣広家、先の神主相見左京亮盛宗にて御座候。盛宗祭政共ニ不法式ニつき、神主職御採坊、則相見及断絶候。然ル所当社之儀は上古中古より数代之御繪旨御教書等有之、勅願所并將軍家御尊敬厚、分明成ル故ニ付、神

主職断絶之節、内藤官兵衛尉綱宗、京都より依

台命而同拾八年当国当郡当所之罷下り、其後人

王百八代後陽成院之御宇、豊臣朝臣秀吉公朝鮮

御征伐之刻、古之由緒有之故当社へ異国降伏之

御祈願被仰付候。将又内藤官兵衛慰儀も渡海仕

御船中安全之旨御祈願被仰付候。則出軍之供奉

仕、肥前国松浦郡名古屋御陣所へ罷越渡海仕候。

右為御褒美菊桐之御紋付御乗物拝領仕候。且又

当社八幡宮え右異国降伏之御感応成就之奉納二

三番叟之面翁面御納メ被遊候。数代内藤家重宝

二仕置候。其節道中人馬往来之御墨付老通官兵

衛尉当二被仰付候。此節ハ雲州戸田城構二而当

国迄支配仕毛利家吉川藏人豊臣広家方へ依台命

書出候と申伝へ候。代々重宝仕候。此之外二も

内藤家由所書等官兵衛尉代并官右衛門代二数多

有之故二旧記等記ス。

一官兵衛尉当所引越候節妻并実子官右衛門召連罷

下り、当国当郡八幡郷馬場え居住仕候。其後弟

官太夫も跡より当所綱宗方へ罷下り候。

一上古中古より御社領も千石以上、其後千石以下

有之候処、兵乱且又御繪旨御教書も相見左京亮

断絶之節、紛失盗取り漸ク御社領も少し残り有

之候。且又数通書物等も此砌紛失多、内藤官兵

衛尉主職之砌より万端書留申残置候。

一二代内藤官右衛門藤原綱只

右ハ先官兵衛尉実子二而京都より召連罷下り、

当社主職相勤内藤家相統仕候。此節当国日野郡

・会見郡・汗入郡・雲州能義郡・意宇郡辺迄官

右衛門方より社職之輩支配仕候処、天正十六年

二神祇官八神殿当時之京都吉田御本所え今出川

筋より秀吉公奏聞有之、神樂岡へ御移被遊候二

付、諸国一統社職之輩ハ神祇之御裁許可蒙御触

達有之、右郡内之社主職不残当家より御本所吉

田殿へ取次、再応之往覆御直書并御役方書則官

右衛門実子初而内藤家御裁許頂戴始二而、三代

近江守綱広と名乗り、右之支配取次万端仕候。

官右衛門儀実子近江守へ右之通り主職相渡し、

自分二は隠居仕万事及相談候。

此之節官右衛門綱広

一 男子御裁許頂戴内藤近江守ト云

二 男子小助御裁許頂戴内藤紀伊ト云、此之

小助も当国当郡米子村筋へ差出、浜通社方持

セ支配致さす。其後小助方より兄弟分二致候

而善太夫と申者後二御裁許頂戴高嶋河内守と

名乗り其々持宮ヲ拵へ主職致サスル也。其比

之惣筆頭万事取作舞之義、近江守綱広八幡郷

居住二而御本所吉田殿へも添状等仕候。其後

弟中書并綱広実子中務少輔迄其通り取合支配

仕候。官右衛門此作舞之砌、子供不及申其外

親類之交リヲ致、或は契約分之兄弟二致候者

数多二而、退転之宮柄ヲ取立且ハ主職ヲ願相

立候二付、此例之家別れ多有之事共二候。畢

竟右官右衛門年来二及候二付、実子綱広御裁

許頂戴させ、万事自分二ハ後見之取作舞二有

之候。

一三代内藤近江守藤原綱広 神祇官嶺長上御裁許

慶長十三歳七月七日

右近江守綱広実父官右衛門相統仕万事取作廻主

職相勤、然ル処病身故右之社方出入且又取次旁

相勤難成、依之綱広弟内藤中書綱次ト名乗り候

而近江守代勤仕候故二、御裁許無之、中書代勤

之間故御本所表其外取合之書状数多有之候。故

二当国之大守因伯御入国後始而当社御建立之砌

寛永十一年甲戌御棟札ニは神主内藤近江守綱広

直子中務卿綱寿と有之、中書義は不知、雖然り

ト中書代勤二而中務卿へ万事近江守病身故代勤

致シ首尾能相渡候間、当家一代二相立候事末々

相統二も如右申伝へ先祖祭祀大切二可致事。

一四代内藤中書藤原綱次 神祇官嶺御裁許無之、

近江守綱広病身二付キ万事代勤相守ル也。但シ

代勤ハ元和九年癸亥年より相勤候而、寛永十四

年近江守実子中務卿御裁許之後為主職相渡ス。

此之代勤之間十四年之年限二相成ル也。

一五代内藤中務少輔藤原綱寿 神祇官嶺長上御裁

許、寛永十四丁丑六月廿三日 兼英卿御代

同御裁許寛永十七庚辰歲七月十一日兼里郷御代

右御裁許二有之候は、近江守綱広より中書綱次

中務卿迄三代諸社家添状迄仕候処、此御因伯之

大守御入国寛永九年二被仰渡、同拾年二両国共

二鳥取城下と何事も御定、御判物等も十年二被

差出候。兩國之諸家供惣頭も鳥取城下二御定二

相成り候二付、任御国法当家より之添状御本所

表へも此御相止申候。併右之由所社格家柄故、

中務二度上京仕、御本所吉田殿二も御達置其節

御裁許別紙二被仰付候。

寛永十七年之御裁許二而大祠官号御免許二而御

座候。且又御国法二も万事当国当郡之筆頭二相

勤申候。当社領御證文寛永十年当大守公御代、

神主当二而近江守へ被仰付候。尤此節代勤は中

書相勤候砌其後水積之節中務卿当御書付被仰付

候。

一御先代御領主より御寄附社領元和年中之御証文

も近江守へ御預ケ被置候。御書付頂戴仕候。

六代内藤右京亮藤原綱重 神祇官嶺長上御裁許、

寛永十四年丁丑六月廿三日、兼英卿御代。右之

右京代当国当郡幣頭役仕、尤当郡幣頭役之始り

ニテ御座候。畢竟前格之由緒故被仰付候。但、

承応二年癸巳年当社御造管之御棟札ニは、神主

内藤中務綱寿美子内藤右京亮綱重并綱重弟掃部

助寿綱と有之候。延宝元癸丑年又々当社御造管

御棟札ニは神主内藤右京亮寿葉と御座候。

一掃部之助義は右京代二当国当郡尾高二宮大明神

先神主出入之公事有之、退転被仰付、其後二宮

社右京方へ御預置、右二宮先神主宮永断絶二付、

主職願差出尾高へ差越御裁許等頂戴仕候而、内

藤婦部と名乗り居住仕候。

一綱重弟好松当国当郡宗像庄宗像神社へ主職願差

出し、願之上御裁許等頂戴仕候而内藤越前名乘

り居住仕候。

一七代内藤伊豆守藤原寿長 神祇官嶺長上御裁許

延宝六戊午年九月七日 但し元禄年中七年九月

日当社御造管御棟札ニは、神主内藤伊豆守寿長

と有之、又正徳五年乙未十二月御棟札ニは神主

内藤治部少輔寿長一子定之丸盛寿と有之候。定

之丸義は早世。

一男子 清見佐々木養子二成ル

二女子 日吉津田口縫殿妻二成ル

三女子 淀江主殿妻二成ル

五男子 當時百姓二出ス 弥右衛門事

四女子 原 長谷川大和妻二成ル

六男子 始 大山領大武村へ養子ニ参り、当

家相統無之故二取返し、千倉寿廣と名乗り、

後二近江守ト云へり。

一八代内藤舎人藤原寿職(付箋、内藤左門藤原寿

陳)但幼名藏之進と云、神祇官御裁許は谷川村

相見山城方大袋村弁才天社相渡申候故、右之社

二付添へ遣、尤御裁許ハ享保年中也。

一当社御棟札ニは神主内藤舎人壽職、同姓千倉壽

広、右之通有之候。右舎人妻は当国当郡浜堺目

余子社森太夫姉也。実は伊豆守弟ニテ千倉若年

之間相勤ル也。

一九代内藤近江守藤原寿吉 神祇官嶺長上御裁許

寛保元年八月六日 兼雄卿御代也。

右妻は当国米府稻荷社幣頭門脇丹下娘

一男子 市部 後遠江守ト云

二女子 谷川 相見山城妻

三女子 細見 遠藤采女妻

一十代内藤遠江守藤原寿常 神祇官嶺長上御裁許

宝曆八年七月十六日 兼雄卿御代也。

右妻ハ当国当郡法勝寺村八幡宮神主中林要人姉

一男子 千之丞

二男子 岩治郎

一三七 伯州会见郡大社八幡宮御由緒書

米子市東八幡二七六 八幡神社蔵

(表紙)

安永八己亥年五月神吉日

伯州相见郡大社八幡宮御由所書

付り、内藤官兵衛以後代々記録
正神主 内藤遠江守

伯州会见大社八幡郷八幡社由所書

一今度当社由所書差出候様ニ御月番何々守殿より被仰渡候間、以書付奉申上候。抑一国一郡大社八幡宮勸請之由来は、人皇四十三代元明天皇和銅年中建立之由、代々申伝候得共、余り年久故、時之依兵乱或は致焼亡其子細旧記等不分明ニ御座候。雖然中古七拾四代鳥羽院之御宇天永二年新二造榮棟札等只今ニ御座候。其後当安永年中迄凡ソ六百六十年程也。造榮建立之棟札等誠ニ数多御宮ニ納り当時迄明白ニ御座候。中古右大將頼朝公鎌倉鶴岡八幡宮御建立之砌、諸国一ヶ国ニ八社之八幡宮建立之御下知之節、当社再勸請之由、其後或は国主或は領主時代節之建立造榮ニ御座候。右之趣棟札ニ御座候。併棟札も文字不分明成ルも御座候。年来之儀ニ御座候得ば

虫喰ニ成り候も御座候繁數々候間先ツ如此ニ奉申上候。往古は為社領千石余も御座候由、其後五百三拾石程ニ相成り候処、先年当国大流水之節右之社領田畑流失セ、漸ク残り候而當時は高三拾四、五石程宮付ニ相成り、当時領主よりも隆地ニ而差添へ申候。右之次第故御宮柄古ハ不及申上中古後迄も私家より外ニ社家も數々御座候。社付待分(待分)之者も同然ニ御座候。然ル処或は兵乱之砌退散致候者も有之、又は祭政之違道を募、我意乱法成ル職道ニ不在身持故其時之以命其家及断然ニ候義も有之、社領は洪水ニ流失セ国主・領主は依不成治国節々時々ニ入替り旁以旧日記等不分明ニ相成ル義共數多御座候。其乱法之節八幡宮御宮付之宝物、弘安・建武之比之御繪旨、將又応安・応永之節之御教書共も或は盜取り或は焼亡且ハ売取り言語同断難尽筆端義共ニ御座候。故ニ今ニ遠近之土民百姓之手ニ渡り候も聞及、又は壳徳利潤之沙汰ニ相成候筋も有之、重疊其々職道身ニ仕候而は口惜次第共數々多御座候。已前より之正明を守り當時迄祭政之御掟專勸行仕、右運転乱法ニも残り候家は乍恐私忝人ニ而御座候。往古中古より數代当社職務正神主役全ク相伝へ申候。尤年久故中古迄之義は系図計りニ而万端難書留、中古北面之侍私

家え右之乱法之砌御宮由所柄故為養子被差下候も私之家ニ而、中先祖内藤官兵衛と申候。其以來は万事ニ何事も私迄數代明白ニ旧記等迄控へ置、一天四海靜謐ニ修身治国平天下を奉祀候。前々より八幡社支配之神領之内は不及申上ニ、或は職分之道筋之儀ニ付当国日野郡・汗入郡又ハ雲州意宇郡又能喜郡之神職之輩、本所吉田え往復之添書キ、將又御裁許取次万事吟味、私家先祖より仕右之証文教通所持仕候。且又右神領之内社侍・社役并ニ町家百姓ニ至迄一切支配仕候処、前書申上候通洪水ニ御神領流失セ兵乱ニ退散いたし、旁以只今は右之書付等計り残り申候事共ニ御座候。尤内藤官兵衛相勸申候節は將軍宣旨一天泰平之御玉串願上申候証文等御座候。外ニ人馬往来御証文頂戴仕候義も御座候。右之書付は只今ニ私代々家ニ大切ニ仕置候。近古豊臣朝臣之朝鮮征伐之節も異国降伏之御祈願当社八幡宮被為仰付、則舟中迄罷越異国降伏之御祈願申上候。御祈願成就就二付、御宮奉納ニ菊桐御紋付之翁面御宮納り只今ニ御座候。其節内藤官兵衛ニ右奉抽丹誠之由、為御保美ト菊桐之御紋付乗物拝領仕候。其外御祈禱筋合も段々仕候。天正年中より後ニも中村伯耆守領主之砌ニ至つても当社八幡宮え月參等仕候節も有之、其外先

々領主備後国神辺城主楢(杉)原兵庫頭景盛、出雲国伯州掛領吉川藏人広家等皆以信仰之上寄附状或寄進物等何レも仕候事ニ御座候而、内藤官兵衛子息官太夫其後代之私迄相勤申候処、当時領主よりも造営之砌為建立修全等少々差出申候。尤郷内村中之惣氏子共万端出情仕、宮結り等も出来仕候。雖然往古中古之申上候旧記之様子ハ誠ニ中絶ニ有成り、誠神位之おとろへ扱々残念ニ奉存候。此ノ砌由所書御尋ニ付、荒々書付差上申候。御宮柄故私之大先祖より中先祖内藤官兵衛迄万端作舞宜、格式等右ニ付順へし候処、御宮次第ニおとろへニ相成り候得ば私之家も勿論次第ニすいび仕事共ニ御座候。当社武神尊敬代々紛無御座候処、右之様子故何卒御武運榮久御国家安全之旨ニ被為思召候而乍恐御取立相成候様ニ奉願候。尤右之古格由所ニ付残り候記念は一國一郡大社ト只今ニ称し、私家郡中惣社家座頭ニ何事仕来り候事ニ御座候。右之趣ニ御座候間只今諸事国主祈願之砌遷宮等之節会见郡中不残社家共相集り勸来、祭礼等も注連下郷内之社職之輩相詰メ神勤申候事ニ御座候。尤祈願之節郡中之神職不残相結来り、一國余社其例無御座候。加様事共計り古中古之由所残り申候事ニ御座候。併万事只今減少ニ相成り候、至つ

て内外共社位おとろへ扱々残念成ル次第、誠ニ離申上尽義ニ御座候。何分御披露之上当社御取立被為遊候様ニとは恐多義ニ御座候得ば尊意一言を以而万民出情ニ相成り候様ニ奉願候。左候得(ば)、松寿千年緑り日々盛にして八幡宮神徳威光時を得たりと朝夕奉欽迎神慮事ニ御座候。此段宜様ニ御評儀奉願候。以上。

何国何郡何社神主
年号月日 内——判

御月番 本社御奉行所

解説

市内東八幡に鎮座する旧郷社八幡神社は、奈良時代創建の当地方きつての大社である。古くは相見八幡・相見庄八幡宮などと呼ばれ、近世では馬場八幡とも称された。当社の神主内藤氏は、米子城主吉川氏によつて招かれたと系図に記されているが、それまでは紀氏の系列に属する巨勢氏や相見氏が社務をつかさどつたといわれている。内藤家には、本文でみるように、宝曆(一七五一—一七五二)から文政(一八一八—二九)にかけての四種類の記録が残されており、当社の変遷の概要を知ることが出来る。

一三八 八幡宮社領并旧記録写差出控

米子市東八幡二七六 八幡神社蔵

(表紙)

文政十一年子八月廿日
八幡宮社領并旧記録写差出控 内藤佐渡守

当社八幡本記

凡テ吾国ハ神明統伝シテ制ヲ立ツ、誠ニ皇都ヲ恢郭シ、今運屢長蒙、民ノ心朴素、時ニ随ツテ元々ヲ鎮ム、上ハ則チ乾靈授国ノ徳ニ答エ、下ハ則チ皇孫正シキヲ養フノ心ヲ弘ム、然ル後(但シ此間虫食ナリ)都ヲ以テ聖造ヲ妨グルライカンセン、皇天ニ祖ノ詔命ニ復シ、神籬ヲ建樹スルハ此時ニ発スルモノナリ。粵ニ奴等神職ノ家ニ生レ、神世ノ古事本朝ニ祖宗廟ヲ尋ネ、八幡宮ノ起源ニ鑑ミルニ、天皇十六代応神天皇、諱ハ誉田天皇、足仲彦第四子也、母ハ氣長足姫尊ト曰ウ、天皇皇后ヲ以テ新羅ヲ討ツノ年、歲次庚辰十二月、筑紫之蚊田ニ生マル、幼ニシテ聡ク玄監深遠シ、動容進止、聖表有異焉。皇太后摂政之三年立チテ皇太子ト為ル、「時二年三」初メ天皇孕マレタマイテ、天神地祇三韓ヲ授ク、既ニ産ル、ノトキ、穴腕ノ上ニ生イタリ、其ノ形軀ノ如シ、是皇太后雄装シテ軀ヲ

負^キエルニ肖^アエタリ「肖、コレヲ阿^ア叙^ニトイウ」故^カ其ノ名ヲ称^シエテ菅田天皇ト謂^フウ、「上古^{イニシ}時俗、輒^ニヲ号^スイテ褒^ム武多^ト謂^フウ」一ニ曰^フウ、初^ハ天皇太子トシテ越^コ国^ニ行^キテ角鹿^{ツク}筒飯^ケ大神^ヲ拜^シタマウ、時^ニ大神太子ト名^ヲ相^ト易^ス玉^ウ、故^ニ大神^ヲ号^ケテ去^イ来^サ紗^サ別^ト神ト曰^フイ、太子^ヲ菅田別尊^ト名^ク。然^バ則^チ大神ノ本名^ヲ菅田別神、太子ノ元ノ名^ヲバ去^ク来^ク紗^ク別^トト謂^フウベシ、「此^レ処^ニ五^ノ字^ノ位^ノ虫[」]」然^レドモ見^ル所^無シ、未^ダ詳^ナラズ」二十二年三月難波^ニ幸^シテ大隅^宮ニ居^ル。四十一年二月天皇^明宮^ニ崩^ズ。

一書^ニ云^ウ、応^神天皇^本名^ハ菅田^{天皇}、又^胎中^天皇^ト号^曰イ、大和^ノ輕^嶋豐^明宮^ニ居^ル、此^ノ御^宇博士^ヲ百^濟ヨリ召^シ、経^ヲ伝^ウ、央^{太子}以下^各コレ^ヲ習^イ学^ブ、是^本朝^経学^ノ始^ナリ。惟^厥此^州此^郡鎮^座之^八幡^{大神}ハ、人^皇四^十四^代元正^{天皇}養^老四^年九^月異^国襲^来、日^向大^隅大^二乱^ル、朝^延宇^佐神^宮二^寇賊^ヲ平^ゲンコト^ヲ祈^ル、大^神託シテ曰^ク、是^戰ハ其^死傷^多シ、我^甚コレ^ヲ憐^ム、願^クハ寇^平之^後放^生ヲ^諸国^ニ置^ケト、諸^国八^幡ノ放生^会此^{ヨリ}始^{マル}、爾^来当^社其^御宇^国主^ノ詔^勅ヲ奉^ジ、此^川ノ清^流上^四至^八町^ニ靈^地ヲ定^ム、本^社三^軒 中^尊ハ菅^田別^尊 応^神 大^鶴鶴^尊 仁^德 仲^姬 尊^皇后^ヲ以^左右^相殿^トナ^ス。而^シテ別^宮二^宇、右^ハ足^仲彦^尊 仲^良、左^ハ氣^長足^足姫^尊 神^功、奉^仕神^二

神、武^内宿^禰・物^部大^連、門^容神^兩神、隨^神門^官 門^三軒 拜^殿 三^軒 長^廳 三^軒 瑞^籬、鳥^居成^経營^美ヲ 尽^ス。後^ニ常^盤木^生茂^リ、天^雲霧^山前^ノ如^シ、并^ニ木^華白^木綿^ニ照^ル。或^歌二^曰ク、神^風ヤ早^川ノ 瀬^ノ水^清ミ心^ノ塵^モ流^ル刃^キ加^那、此^川ニテ放^生 会^遂行^ス、每^年八^月十^五日^神輿^三尊^川頭^ニ行^幸シ、 種^々ノ物^備ヘ奉^リテ、神^司宇^豆幣^帛ヲ以^テ広^ク厚^ク 称^辭祈^啓ス。集^侍伶^人伎^楽ヲ奏^シ供^奉甚^ダ嚴^然 たり。還^幸シテ国^司武^士ノ騎^ヲシテ馬^ヲ競^ワシム、 而^シテ爾^来宮^地ヲ改^メテ馬^場村^ト名^ツケ、郷^ヲ八 幡^ト号^ブ、往^昔ヨリ数^ケ所^ノ神^田ヲ附^与シテ年^中 行^事時^ニ違^ワズ、懈^怠ナシ、偉^{ナル}カナ盛^{ナル}カ ナ。吾^ガ朝^二所^ノ宗^廟護^国ノ靈^神ノ威^力仰^ゲバ弥 高^ク、信^ズレバ愈^新ナリ、誰^カ畏^敬セザランヤ、 誰^カ尊^信セザランヤ。此^ノ川^ノ流^ハ瀨^ノ替^{アリ} トモ、吾^ガ神^明ノ康^榮將^二天^壤ト^モ二^疆ナ^キ者 ナリ。仍^ツテ当^社神^寮紀^氏家^次苟^今亦^崇敬^シ、 吾^ガ宗^祖謹^ンテ宣^ベ畢^ンヌ、凡^菅田^尊ノ伝^記ハ諸 国^ニ見^ユ、故^ニ詳^ヲ略^シテ載^セザル^ノミ。

覚

一 当^社八^幡太^神之^儀は往^古勅^願所^ニ而^人皇^四拾^四 代^元正^{天皇}之^御宇^養老^四年^九月^四至^八町^之宮^地 ヲ鎮^奉、宇^佐八^幡宮^当地^之勸^請、天^皇始^政夷^大

將軍^公、御^国守^被遊^御信^仰、御^繪旨[・]御^教書^別 而^因伯^大守^公先^刻之^例二^而被^遊御^寄進^委細^之儀 は旧^記由^緒書^写差^上置^候。

御繪旨御教書写

美^作国^青倉^庄地^頭職^為勲^功賞^相見^五郎^庄衛^門尉 宗^国可^令知^行者^天氣^如此^悉之^御状 右^少弁 判 一 但^馬国^土田^郷一^分地^頭職^并龜^別宮^地頭^職事[、]依 為^由緒^地可^被知^行之^状如^件 觀^心二^年卯^十二^月廿^七日 源 判

相見左衛門大夫入道殿

一 寄^進伯^耆国^相見^庄八^幡宮^御宝^前 右^旨趣^者宗^源禪^門衆^病本^覆除^災与^樂併^令依^大善 薩^化眷^属加^護者^歟 然^而弥^為奉^仰家^門繁^榮宿 福[、]以^当国^二宮^庄内^狭少^下地 坪^付別^所令^寄附^之 状^如件 紙^有之

一 宛^行染^埜田^事 応^安三^年庚^戌三^月廿^七日 源 時^義 判

合參段半

一 伯^耆国^久 保^田庄^三谷^村地^頭職^之事 右^意趣^者天^下泰^平殊^当国^凶徒^对治^者偏^所奉^憑当 以下^御公^事等^任先^例可^令勤^仕之^状也 正^平九^年二^月 真^吉判

一 伯^耆国^久 保^田庄^三谷^村地^頭職^之事 右^意趣^者天^下泰^平殊^当国^凶徒^对治^者偏^所奉^憑当 社^加護^也、仍^而寄^進之^状如^件

建武五年六月二日 前伊豆守 源 時氏判

八幡領高田拾石之延年貢先以近江守え被預置や

うとの御内儀候、度々此旨申入候儀其通二被仰

付尤候 恐惶謹言

極月廿八日 友松六左衛門尉 判

武田市左衛門尉殿

安西八兵衛殿

糺^④最前得御意置候条先其段二被成候而可指置

候、以上

一会見郡八幡宮社領高四拾式石并宮林竹木共二被

遣候、自今以後可有所務者也

元和四年八月十六日 惠藤作太夫 判

神主 近江守殿

一相見郡八幡ノ馬場村神領定土免之事

高五拾五石九斗八合 内四拾石神領 此物成拾

六石八斗 但シ四ツ式分

残高拾五石九斗八合 (物成六石六斗八升壹合

夫米 四斗壹合)

二口合七石八升式合 外二口米有

右相定上者霜月以前二皆済可有之者也

上田宗右衛門

元和六年四月十六日 萩原源右衛門

惠藤作太夫

八幡神主 三介殿

以上

寛永九年内々被申聞候当社八幡領従前之高四拾

石式斗七升三合馬場村下札之内二書付庄屋之相

渡候条、其心得ヲ以弥社中諸事不可有油断候、

恐々謹言

九月廿六日 円山勘解由 判

神主中書殿

一伯耆国会見郡馬場村内高三拾四石五斗三升為社

領御寄進之永可有収納者也。仍如件

乾兵部少輔 判

寛永拾年十一月廿八日 和田飛彈守 判

荒尾志摩守 判

荒尾内匠介 判

八幡宮神主 以上

八幡馬場村神主中書屋敷廻り之竹木先代より社

領付来り候間公儀御用ニ御伐有間敷候、恐惶謹

言

野崎三右衛門 判

寛永拾三年二月廿三日 沢住左近右衛門 判

吉田急兵衛殿

高田勝太夫殿

相見^⑤郡八幡宮林竹木知行ニ付来り候間、従公儀

御伐有間敷候、為後日之如此也。

寛永拾三年三月十五日 沢住左近右衛門 判

野崎三右衛門 判

神主中書 殿

内藤遠江

其方儀此度社致造業御幕御提灯之儀奉願候格

別之社格ニ付、願之通御紋御免被成候旨被仰渡

候

明和五年三月廿七日 寺社 御役所

棟札

一七十四代鳥羽院御宇天永式年御建立被遊候、古

棟札干今御座候ニ付、安永八己亥年棟札写有増

差上申置候、然ル処自是先代古棟札三枚御座候

得共文字不分明無拠其保納置申候事

棟札

一八十二代後鳥羽院御宇右大将頼朝公再建被仰付

候、其後觀応・応安・応永年中ニも御造營被仰

付候得共、旧記而已云々。

棟札

一百四代後土御門院御宇明応七年十一月廿日御造

營被仰付候事

棟札

一百八代後陽成院御宇天正十七卯月二日御造營國

郡主吉川藏人頭四品拾遺豊臣広家と御座候事

棟札

一因伯大守公寛永十一甲戌年社頭悉御修覆被仰付、

則御普請御奉行は大西定兵衛、大工頭は野間三郎右衛門、小工次郎右衛門、其外大工三拾五人被遣候而造営成就仕候、自夫御代々御修覆奉願候処、御時節仮成二取繕置候事、

一寛保三亥年十月被遊殿様御婚姻候二付、高三步通老年限末々より差上申候二付、民安全之御祈禱被仰付候、御証文所持仕候事、

一若殿様御姫様御痘瘡安康之御祈禱被仰付候、御証文所持仕候事

一大閣秀吉公より三番叟面翁面当社八幡宮へ被遊御寄進干今奉納仕置候事、

一前国守中村伯耆守殿三拾六歌仙御奉納、干今御座候事

一河岡山城守殿大般若経御奉納、干今御座候事、
一秀吉公之官兵衛より馬壺正献上仕候二付、駿足之由二而馬一疋被相贈候自愛不斜候、猶青山主水可述候、謹言、

一其方申之通承知之候、乍更何之条も無案内候間、於爰元不相成候、御帰朝之上を以存知之衆相尋無支候ハバ随分申伺可調遣候、恐々謹言

六月六日堂文

栗彦判
桂左判

勘兵衛殿

以上

官兵衛事御用之時被召出候、いかにも自分二不成由候間罷出候時は馬舟之儀可申付候、恐々謹言

七月廿日

井喜判

山の判

宇田川喜三郎殿

佐々木源左衛門殿

一寺社御奉行山田弥兵衛、同吉村清左衛門御役之節御目見え被仰付候御証文所持仕候事、

一親遠江正月十五日登城御目見え被仰付御祈禱御札城へ持參納申候、然ル処正月十五日八幡宮初祭注連下社家致出勤候二付、日替奉願候処、閏

十二月廿二日被仰渡二月朔日願之通被仰付候事

一私義親遠江通奉願候処、文化式年丑四月三日願之通被仰付登城仕候節御祈禱御札御城へ持參仕干今納申候事、
一安永八年六月廿三日親遠江へ御直触被仰付候二付、引続寛政十二年申三月廿七日、親遠江通被仰付候事、

一吉田殿御直触御証文写

其許今般就願被復旧例格社被仰出候、自今惣幣頭不及添簡上京可有之候也、

鈴鹿筑前守判

文政式寅年五月五日 鈴鹿豊後守判

内藤藏人殿

鈴鹿河内守判

覚

一此度社領御取調被仰出并由緒書差出候様被仰付奉畏候、依之社領御証文旧記写差上申候、尤当社八幡太神之儀は往古勅願所二而四至八町之宮地二而御諭旨御教書御国主御信仰之社二而別而因伯太守公先判之例社領被遊御寄進御幕。御提灯・御紋被仰付候、右之段御断申上候間宣被仰付可被為下候様奉願候、以上

文政十一年子八月日 内藤佐渡守

河田十右衛門殿

一筆啓上仕候、先以弥御安康可被成御座目出度キ御儀二奉存候。然は此度社領御取調被仰出并由緒書差出候様被仰付奉畏候。尤当社八幡太神之儀は従往古御信功社二付、社領并御幕・御提灯・御紋被仰付候。則別紙書付ヲ以其段御断申上候間、宜御取計奉願候。右為可得貴意、以愚札如斯御座候。恐惶謹言。

八月廿日 内藤佐渡守 綱長(書判)

河田十右衛門様

下役五人えも

解説

この史料は、末尾の「覚」によれば、文政一一年（一八二八）に、恐らく藩の命令により八幡神社の由来及び伝来の記録の写しを書いて差し出したもので、古いものでは観応二年（一三五）（南北朝時代）の記録が載せられている。また江戸時代の棟札の写しも多く記され、当社の歴史の一端を知ることができよう。

一三九 伯州感応寺由来

米子市祇園町一―八九 感応寺藏

伯州相見郡米子城下慈広山感応寺

- 一 建立之事 文禄元壬辰曆、凡及百一年矣。
- 一 境内後八山、前八城廓之内堀坂下迄入り、拾五間、長サ及三町、地子免許、山從過半下、堂舎仏閣有之、本堂七間半、庫裏三間半、書院二間半、鐘樓老間半、番神、本社拝殿二間半、明神 本社拝殿三間二、中村伯耆守一忠公御影堂三間也。都合九軒有之。
- 一 大旦那之事 駿河国之大守、中村式部少輔殿子息中村一学殿、後二松平伯耆守殿申候。知

行拾八万石也。法名、青龍院殿前伯州大守一融源内大居士、慶長十四年己酉五月十一日逝去。至元禄五壬申年及八拾四年矣。

一 中村伯耆守一忠公御影一軀并追腹兩人之御影二躰、老人ハ服部若挟

法名立行院梅窓常薫慶長拾四年五月十三日

老人ハ垂井勘解由、法名大法院善休常佐。

一 開基 龍岳院日長上人、寛永七庚午曆七月廿三日示寂、右ハ緑覚院、後二被改龍岳院候。

居住之寺之事 甲州小室妙法寺、駿州貞松蓮

永寺、駿州府中感応寺、紀州和歌山感応寺、備前岡山之蓮昌寺、雲州松江慈雲寺、洛陽立

本寺、在住五年云々。

一 寺領之事 中村伯耆守殿為位牌料都合式拾石也。

当太守松平伯耆守殿迄、代々折紙御墨印有之。

一 年貢畑之事 老反九畝、高九斗也。

一 為靈供料 寄進地二反余、高老石六斗也。

一 年貢地也。

一 当寺御靈宝之事

御消息三行四拾字、日出上人御加判。

日月上人御加判、同一行十三字、日新上人添状有之

御加判。元判御加判添状有之。

一 御形木 三枚継、寺号、本尊遠師、

御加判、慶長十一丙午卯月吉辰、開山日長え授与之円脱師御加判老幅有之。

一 遠師 五枚継、当寺常住本尊。

慶長十一丙午卯月吉辰、開山日長へ授与也

一 遠師 三枚継、御本尊慶長十三年戊申 上人号御免許。

伯州米子城下

元禄五年壬申正月日 慈広山感応寺判

第八世 観行院日教

在判

解説

感応寺第八世観行院日教によつて書かれた由来記で、簡にして要を得た内容となっている。次に示す漢文の由来記「常住山感応寺記」と比較すべきもの。

一四〇 常住山感応寺記

米子市祇園町一―八九 感応寺藏

駿州常住山感応寺者、鼻祖上足佐渡阿闍梨日向聖人開闢靈場也。当初在于富士山之麓寺号瀧泉、本真言道場也。于時寺主邂逅。宗祖祖乃示之闢真言七国之邪見、演妙経応時之正理。於焉寺主頓倒確